

日本の近代性に関するオタゴ会議

鈴木, 裕輔

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院 国際日本学インスティテュート専攻委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学論叢 / 国際日本学論叢

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

49

(終了ページ / End Page)

57

(発行年 / Year)

2010-03-18

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005962>

平成二十一年度 国際日本学論叢第七号 二〇二〇年三月十八日発行 抜刷

学会の動向

日本の近代性に関するオタゴ会議

法政大学国際日本学研究所客員学術研究員

鈴木裕輔

学会の動向

日本の近代性に関するオタゴ会議

法政大学国際日本学研究所客員学術研究員

鈴木 裕 輔

一 はじめに

去る二〇〇九年八月一四日から一六日にかけて、ニュージーランド南島東部の都市ダニーデンにおいて、日本の近代性に関するオタゴ会議 (Otago Conference on Japanese Modernism、以下、オタゴ会議) が開催された。筆者も報告者の一人として参加し、“The first professional baseball team in Japan and Taisho modernism”と題する発表を行った。

本報は、オタゴ会議の様子を報告するものである。

二 ダニーデンとオタゴ大学の概要

ニュージーランド南島東部に位置するダニーデンは、一八四八年にスコットランド自由教会の移民によって本格的な開拓が始まった都市である。ダニーデン (Dunedin) という名称はゲール語でエジンバラを表す Dumeideann に由来しており、しばしば「南のエジンバラ」「スコットランド以外で最もスコットランドらしい都市」という名が冠せられる。その名の通り、スコットランド移民が入植後に初めて築いたスコットランド長老派教会のファースト教会や、一八七六年に完成したノックス教会、さらに市の中心部を形成する八角形の広場オクタゴン (Octagon) に隣接した市会議事堂、市庁舎、セント・ポール教会、あるいはオクタゴンから東に徒歩五分ほどの地点に建つダニーデン鉄道駅など、スコットランド風ないしヴィクトリア様式の建造物が市街の随所に現存している。

ダニーデンの人口は、二〇〇九年六月三〇日時点で約一二万人とニュージーランドで五番目の規模である。^① 一九世紀後半には金採掘の最前線として活況を呈したが、現在は文教、学術都市として知られている。そのダニーデンを代表する教育機関のひとつが、オクタゴンから北に向かって徒歩約二〇分のところにある、オタゴ大学 (University of Otago) である。^②

オタゴ大学は一八六九年に開設されたニュージーランド最古の大学であり、経済学、健康科学、人文学、科学の四部門をもち、各部門はそれぞれ独自の学部、学科を擁している。日本語学科には古典文学や近代以降の文学の他、映像、大衆文化、経済などの講座が設けられており、東京大学、横浜国立大学、お茶の水女子大学、弘前大学、小樽商

科大学、立正大学、文京女子大学との間で交換留学の協定が結ばれ、相互に留学生の派遣が行われている。

三 オタゴ会議の概要

Otago Conference on Japanese Modernism という名前が示すように、オタゴ会議では、日本の近代性や近代主義に含まれる様々な現象を題材とする研究が発表された。会期中の参加者は延べ約一五〇人であった。また、オタゴ会議の開催に当たっては、ニュージーランド・日本交流プログラム (New Zealand Japan Exchange Programme) 、オタゴ大学人文学部門言語文化学部、そしてオタゴ大学から支援が寄せられた。

オタゴ会議は八月一四日から一六日まで行われ、初日には聖デビッド講堂の St David St 550 で会頭講演と基調講演が行われた。

主催者は、オタゴ大学人文学部門言語文化学部日本語学科で、本会場として聖デビッド講堂 (St. David Lecture Theatre) 内の St David St 550 が、副会場として同じく講堂内の St David 1 が利用された。

まず、会頭を務めるオタゴ大学人文学部門言語文化学部日本語学科のロイ・スターズ (Roy Stars) 准教授による会頭講演 “Japanese Modernism Reconsidered” が行われ、基調講演はリーズ大学現代言語文化学部長マーク・ウィリアムズ (Mark Williams) 教授が “(Re)constituting the Historical Trauma of the War in East Asia: A Literary Response to the ‘Overcoming Modernity’ Symposium” と題して行った。いずれも、「日本の近代性」「日本のモダニズム」が、西洋の模倣であるのか、あるいは日本独自の現象かを問うとともに、modernism という概念が単に文学や文化の領

15 August 2009	Session 5: Modernism and Gender	Yasuko Claremont, University of Sydney	The emancipation of Japanese women depicted in Seito (Blue Stocking) and Nyomin Geijutsu (Women's Arts)
		Nishino Ryota, Christchurch Polytechnic Institute of Technology	What does it mean to be a modern worker? An analysis of postwar junior high school history textbook portrayals of female textile workers during Japan's industrial revolution
		Nancy Earth, University of Otago	Early Native Modernist Artist-potter: Buddhist Nun, Ōtagaki Rengetsu (大田垣蓮月 1791-1875)
		Elise K. Tipton, University of Sydney	The Department Store: Producing Modernity in Interwar Japan
	Session 6: Everyday Life in the Modernist City	Yusuke Suzumura, Hosei University	The first professional baseball team in Japan and Taisho modernism
		Chinghsin Wu, University of California, Los Angeles	Transcending the Boundaries of the 'isms': Pursuing Modernity through the Machine in Japanese Avant-Garde Art*
		James Mark Shields, Bucknell University	Between Science and Art: Buddhist Reform and Revolution in late Meiji and Taishō Japan
	Session 7: Modernism in Religion and Ideology	Yushi Ito, Victoria University of Wellington	Overcoming Modernity and Conflicting Views of Japan's Cultural Mission - Inoue Tetsujirō, Yamaji Aizan and Sawayanagi Masatarō
		Masako Gavin, Bond University	Abe Isoo and Kawakami Hajime in Interwar Japan - Economic Reform or Revolution?
		Omura Azusa, Tokyo Institute of Technology	The role of Bungeijidai, the cotierte magazine of the Shinkankaku-ha, in creating Japanese Modernist literature in 1920s in regard to the influence from French Modernist movement
	Session 8: Literary Modernism 2	Rebecca Suter, Sydney University	Cosmopolitanism and anxiety of influence in Akutagawa Ryūnosuke's Kirishitan mono
		Seiji M. Lippitt, University of California, Los Angeles	A Modernist Nostalgia: The Colonial Landscape of Enlightenment Tokyo in Akutagawa Ryūnosuke and Edogawa Rampo *

* Presented in absentia by Roy Starrs.

Table 1 Outline of Presentation

Date	Section	Name	Title
14 August 2009	Session 1: Modernism in the Visual Arts	Peter Leech, University of Otago	Yōfu, Wāfu, and ‘Cut Tōfu’: A Timeless History of Japanese Modernism
		John Szostak, University of Hawaii at Manoa	‘Foul is Fair’: Abject Beauties, Taishō Nihonga and the Psychology of the Grotesque
		Matthew Larking, Kyoto Notre Dame University and Doshisha University	Reorienting painting
		Vera Mackie, University of Melbourne	Can there be an Abstract Body? The Performances of Yoko Ono
	Session 2: Modernism in Music, Theatre and Performance Art: Perspectives from pre-WW2, the 1960s and the 1990s	Peter Eckersall, University of Melbourne	Are we there yet? Hirata Oriza’s ‘colloquial theatre’ and modern theatre in Japan
		Philip Flavin, Monash University	The Koto Music of Suzuki Koson (1875-1931) and Melancholy as a Response to Modernity
		Ken Henshall, University of Canterbury	The Modern in Meiji, and Elsewhere in Time and Place
	Session 3: Literary Modernism 1	Jonathan Dil, Chuo University	Murakami Haruki, American Modernism and Emerging Postmodernism, and the Search for Moral Commitment
		Leith Morton, Tokyo Institute of Technology	Modernism in prewar Japanese poetry
		Henry Johnson, University of Otago	A Modernist Traditionalist: Miyagi Michio and the Making of a (Transcultural) Music Tradition
	Session 4: Modernism in Music and Art	Alison Tokita, Monash University	Naniwa-bushi and Takarazuka Girls’ Opera: two contrasting ‘new’ hybrid forms in Japan’s modern Hanshin culture
		Roman Rosenbaum, University of Sydney	Japanese mythological modernism: the story of Puck

域に留まらない、多様な位相をもつことを明らかにした。その後、一九時三〇分からはオタゴ大学に隣接するエグゼクティブ・レジデンスにおいて歓迎会が開かれ、参加者が約二時間にわたって交流した。

各部門での発表は、二日目と三日目に行われた。「視覚芸術における近代性」、「音楽、劇場、上演における近代性」、「文学の近代性 (一)」、「文学の近代性 (二)」、「音楽と美術における近代性」、「近代性とジェンダー」、「近代の都市における日常生活」、「宗教とイデオロギーにおける近代性」の八部門が設けられ、計二十四題が発表された (Table 1)。会場は、第一、第二部門が聖デビッド講堂 (St David 1) であり、第三部門以降が St David St 550 であった。

発表者の所属機関を地域別にみると、その内訳は以下の通りとなる。すなわち、オーストラリアが九名、開催国のニュージーランドが六名、日本が五名、アメリカ合衆国が四名であった (Table 2)。

両日とも、一〇時三〇分から一一時までと一五時から一五時三〇分まで休憩時間が設けられ、一二時三〇分から一三時三〇分までの昼食時間とともに、発表者相互の交流や、発表内容や学界の最新の動向に対する活発な議論の場となっていた (Table 3)。昼食時には、オーストラリア在住の尺八奏者中島蓉盟氏による尺八の演奏が行われ、参加者ばかりでなく、構内を往来する学生や教職員もしばし立ち止まり、その音色に

Table 3 Timetable of Conference

Time	Schedule
9:00-10:30	Presentation
10:30-11:00	Coffee Break
11:00-12:30	Presentation
12:30-13:30	Luncheon
13:30-15:00	Presentation
15:00-15:30	Coffee Break
15:30-17:00	Presentation

Table 2 Regional Breakdown of Speakers

Country	Number of Speakers
Australia	9
Japan	5
New Zealand	6
USA	4
Total	24

耳を傾ける光景が散見された。

また、二日目には一七時三十分より、大学構内のスタッフ・クラブにおいて夕食会が開かれた。出席者は、発表者とオタゴ会議の傍聴者を合わせて約三〇名で、くつろいだ雰囲気の中、三時間にわたって相互の親睦が図られた。途中、会場の外で学生がバグパイプの練習をする音が聞こえたが、「スコットランド以外で最もスコットランドらしい都市」と呼ばれるダニーデンらしさを実感させる、予期せぬ余興となっていた。

四 オタゴ会議に参加しての所感

オタゴ会議の最大の特徴は、参加者と発表者がほぼ一致していたという点にある。確かにヨーロッパ日本研究協会のような大きな日本研究の学会に比べれば、オタゴ会議の規模は小さなものといえるだろう。しかし、それだけに、かえって参加者が「日本の近代性」や「日本の近代化」という点に的を絞ってなされた発表を余すところなく耳にすることができ、結果的に自らの見聞を広げる機会を手にすることができたのである。そして、発表者が、「日本の近代性」や「日本の近代化」を主題とし、文学、歴史、社会、経済、文化といった諸分野からこの主題に取り組んだことで、発表の間に巧まざる関連性が生ずる場面がしばしば見受けられた。これは、特化された主題に基づく学会の特色であるとともに、そのような相互作用をも視野に入れたスターズ会頭の手腕の成果といえることができるだろう。

今回は、会期初日に行われたスターズ会頭とウィリアムズ教授の講演が、modernism という概念のもつ多様性と多義性を正面から取り上げたこともあり、参加者が多かれ少なかれ「そもそも近代性、近代化とはどのようなものか」

という根本的な点を念頭に置きつつ発表し、あるいは傍聴することとなった。これは、一見すると当然の態度かもしれないが、公知と思われる概念や術語であっても、根本を問い直せばそれに対する認識が実は一知半解の域を出ていないのかもしれないということを考えるためには、不可欠な過程といえる。その意味でも、スターズ会頭とウィリアムズ教授の講演は、単なる記念講演という枠組みにとどまらない、重要な意味と意義をもっていたといえよう。

また、諸外国における日本研究を活発なものにするためには、各国の日本研究の基盤を整え、研究成果を世に問うとともに、日本国内における日本研究の環境を充実させることも重要である。そして、オタゴ会議に、日本のみならず各地の研究者が集うことができたのは、今後の各国における日本研究の促進に、少なからぬ寄与をなしたということができよう。その意味でも、参加者が互いに交流し、率直な意見の交換を行うことのできるオタゴ会議という場がもつ価値は大きいものであった。

五 おわりに

オタゴ会議が無事に閉幕することができたのは、会議の準備段階から会議終了後に至るまで発表者に向けられた、ロイ・スターズ会頭の献身的な支援のたまものである。学会の主催者が責任をもって運営の任に当たるのは当然のことといえるかもしれない。しかし、三日間の会期中、すべての参加者が快適な環境を享受できたのは、会議の企画、立案に始まり、発表の募集や採否の決定、発表者の区分けと排列、さらには歓迎会と夕食会の手配に至るまでを調整したスターズ会頭がいればこそというのは、紛れもない事実である。この点はどれほど強調されても過剰ということ

日本の近代性に関するオタゴ会議

はないであろう。

小なりとはいえ、充実の度合いでは他の大規模な学会にも劣らない今回のオタゴ会議の成果が今後の日本研究のさらなる発展に資することを期待しつつ、本報告を終えたい。

註

- (1) Encyclopadia Britannica Online, “Dunedin”, Encyclopadia Britannica. Encyclopadia Britannica Online. Encyclopadia Britannica, <http://search.eb.com/eb/article-9031472> (accessed 31 January 2010).
- (2) Statistics New Zealand, “Subnational population estimates tables”, Statistics New Zealand, http://www.stats.govt.nz/methods_and_services/access-data/tables/subnational-pop-estimates.aspx (accessed 31 January 2010).